



115号
2006/7/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@m2.ocv.ne.jp
ホームページのアドレスが上記に変更になりました。



陝北の人々・麦の季節 (中国陝西省園川県)

周路 撮影

「わんりい」115号の主な目次

北京雑感その6「北京のくらしと少動物」	2
媛媛来信②「武聖人・関公」	3
黄土高原来信第二部「陝北女娃」9〈海芳〉	4
10〈美京〉	5
「陝北女娃」〈海芳〉／〈美京〉・原文	6
私の調べた四字熟語[4]「温故知新」	7
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	7
'06濟州島 <small>ハルラサン</small> 漢拏山へ②-下山まで	8
遠くに行きたい・ドラマチック秋のソウル旅	10
東チベットにて「激動の遊牧地域小学校」	12
中国を読む③④【赤い月】	13
ラオス山からだよりIX「モンの民話とくらし」	14
「活動報告」インドネシア料理の会	15
「わんりい」掲示板	16

♪ 中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう! ♪
「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!
会場:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分
町田東急裏109ファッションビル7F

会費:1,500円(一回ごと)

【7月の練習日】7月14日(金) 19:00~20:30

【8月の練習日】8月18日(金) 19:00~20:30

練習曲:「冬のソナタ」のテーマソング

韓国ドラマ「冬のソナタ」は中国でも大ヒット。テーマソングは「从開始到现在」という中国名で多くの歌手が歌っています。きちんと歌えるようになるまで4回に分けて指導いただきます。7月は、その3回目です。

8月には全部歌えるようになるでしょう。繰り返し練習しますので、ご都合で1回の参加でも楽しめます。

指導: zhào fēngyīng 趙鳳英 (元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

*体験参加(1200円)歓迎 *録音機をお持ち下さい。

5月15日6時、今年、北京での初めての朝は、カッコウの声で目を覚ました。西三環のすぐ内側ですから、驚きです。直線距離で300メートルほどのところにある紫竹院公園で鳴いているのでしょう。

もう15年近く前に、友人が冗談交じりに、「今、北京の町で見かけないものは、道に痰を吐く人と、鳥と犬。(前者はとりしまりが厳しくなったから、後者は、食べられてしまうから)」と言うのを聞きました。初めて北京に来た時、「痰を吐く人がいない」というのが嘘だとすぐ分かりました。行政の理想は高いのですが、実際はまだままだようでした。中南海はともかく、老百姓^{注)}の住む町では、長年の習慣は政府の号令でも、容易には変えられないのでしょう。

しかし、鳥や犬については、当時、街中でスズメやカラスを見かけませんでした。犬もいないし、公園でハトが屯している光景にも出会わなかったの、「食べられてしまうから」はないにしても、鳥や犬は少ないのかも、との印象を持ちました。それが、1999年に、縁があって清華大学のキャンパスに住んだ時、この印象はいっぺんに吹っ飛んでしまいました。清華大学のキャンパスは、学生を含めて3万人以上の人々が暮らしているのですが、縁が豊富で、しかも背の高い木が多いので、高い梢は鳥の天下で、カッコウは勿論、名前は分からないのですが、日、月、星と鳴く三光鳥のような鳥が鳴き交わっていて、深山幽谷のような趣でした。一番驚いたのは、初めてキツツキのドラミングを耳にしたときで、思わず近くの木を見上げてしまいました。流石に姿は見られませんでした。それ以後、季節が巡ってくると挨拶代わりにドラミングを耳にします。

確かに、北京の町には、スズメやハトは少ないようです。お寺や公園にハトが群れている光景は、いまだに見たことがありません。時折、飼われている伝書鳩が群れで小屋の近くを旋回しているのを見かけるだけです。ツバメもあまり見かけません。私が「ツバメかな？」と思ったのは一度だけ、蓮花池へ行った時、池の上を飛ぶ鳥の飛び方がツバメのようだったので印象に残っています。

スズメは、街中で時々目にするのですが、日本ほど多くはなく、しかも「ちょっと小ぶりかな」という大きさです。捕まえて比べたわけではないので、本当のところは分かりません。周囲の景色が伸びやかなので、中のスズメが小さく見えるだけかもしれません。

日本の都市では困り者のカラスですが、北京では街中で見かけません。公園の芝生をのんびりと歩いてい

るカラスを二、三度みたことがありますから、カラスがいけないわけではないのですが、街中で餌を漁る姿を見ません。

あと、鳥といえば、鴛鴦に飼われている鳥です。不勉強で、まだ鳥の名前を知りませんが、とても綺麗な声で囀ります。鳥かごに覆いをして運んでいるのはお馴染みですよ。去年あたりは、あまり見かけなかったの、流行が廃れたのかと思っていましたが、そうではなくて、鳥インフルエンザの影響で、飼い主が外に出すのを控えていたようです。今年は心配がなくなったのか、鳥かごを下げて歩いている人を見かけるようになりました。先日釣魚台の近くへ出かけたとき、公園の木々の枝に鴛鴦を吊るしている人々を大勢見かけました。涼しい木陰で、鳥の声を聞きながらのんびり出来る北京の老人たちは幸せだなアと思いながら帰って来ました。幸せばかりではないかもしれませんが、少なくとも、のんびり構えることが出来る心のゆとりを見習いたいと思いました。

鳥インフルエンザの影響といえば、三虎橋路にあった鳥屋さん、生きた鳥を選ぶと、その場で絞めて羽をむしってくれるお店でしたが、今年はなくなっていました。鳥インフルエンザの予防のため、行政のほうから何らかの指示があったようです。周りの人々の白い目もあったかもしれません。今は小間物売の店になっていました。

犬はどうでしょうか？ 99年ごろは、犬を飼っている人が少なく、犬の散歩は、ちょっとしたステイタスシンボルになっていました。ところがその後、犬を飼う人は急激に増えて、今では珍しくなくなりました。犬の殆どは小型犬で、シーズーが多かったのですが、最近、ポインター等の大きな犬も見かけるようになりました。因みに、犬の大きさによって登録料が違うのだそうですから、大型犬が増えたということは、即ち富裕層が増えたということ、そして、皆、家の中で飼っていますから、大きな家(アパートメント)が増えたということです。

そして犬のお行儀がいいのも驚きの一つです。むやみにほえたり、よその犬に飛び掛ったりする犬は見ることがありません。慣れた犬は、リードを外してもらって散歩していますが、駆け回ることなく、飼い主の言うことを良く聞きます。私が呼んでも大抵無視されません。但し、飼い主のお行儀は今ひとつで、糞の始末をする人はまだ少ないようです。

注) 一般庶民のこと

悠々たる何千年の中国の歴史は、英才輩出の歴史でもあります。中国の古代文化と文明の発展歴史上に、鮮やかな光を放した人物は数え切れないほど多かったのです。しかし、「聖人」と呼ばれたのは二人しかいません。それは「文聖人」の孔子、と「武聖人」の関公です。

関公は、即ち関羽の尊称です。関羽は、史書の『三国志』の中で、勇武、忠実で、終生劉備に忠誠を尽くし、補佐して、劉備が三国鼎立の偉業を成し遂げるのに貢献した人物です。本来は、名将として広く知られた人物でしたが、その後、関羽は次第に美化、聖化、神化され、「関帝聖君、関帝翁、山西夫子、関夫子、蓋天古仏、協天大帝、伏魔大帝、関帝菩薩、伽藍菩薩」など、多くの呼び名で呼ばれるようになりました。そして、隋・開皇十二年(592)には仏教が「護法伽藍神」の号を、宋・真宗趙恒于大中祥符七年(1014)には道教が「義勇武安王」の号を関公にそれぞれ封じ、関公はとうとう人間から神の席に座るようになりました。

孔子は「文聖人」と言われていますが、関公は「武聖人」と賞賛され、中国の伝統的な美德である、忠、信、儀、勇を一身に集め、社会性のある行為を成し遂げた模範的人物として仰がれています。そして、役人はその「忠」、商人はその「信」、庶民はその「義」を、将はその「勇」を各自の行動の信条とし、それぞれの望を託し、歴代の支配者も、社会の安定に役立つようと望んで、「忠、信、義、勇」の精神を提唱し、上手にそのメリットを利用して来ました。

このようにして関羽没後の千年来、社会各階層は、関公様の完璧な人格から各自の必要に応じる行為の規範となり、関公崇拜は、長い歴史の流れと共に、さまざまな関公文化を形成し、中国の重要な伝統文化の一つになりました。

孔子を祭る廟は、過去二千年間に、数え切れないほど造られましたが、関公様を祭る関帝廟の数にははとも及びません。また、海外でも、中国人が生活しているところであれば、関帝廟が必ず設けられていると言っても過言ではありません。お正月、祖先を祭る折、悩みがある時や願いがある時、人々は謹んで関公様を拝みます。

山西省運城市にある解州は関公の故郷です。解州にある「関帝廟」は天下第一関帝廟といわれます。隋の開皇九年(589)に建てられましたが、その後の戦乱で失



山西运城解州关帝庙（隋）
Temple of Guan Yu at Haizhou,
Yuncheng, Shanxi(581-618)

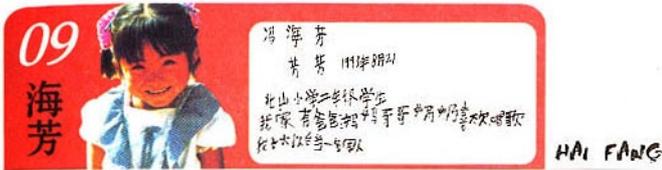
われては再建され、現在のものは、清の康熙四十一年(1072)の大火で全焼した後、十年間を掛けて再建されました。

解州関帝廟は、現在に至るまで関羽を祭る全国で一番大きな場所として、中国内外から、一年中絶え間なく、様々な思いを持つ観光客を引き付けてやまない古い観光地です。そしてここには、雄大で壮麗な建物があるばかりではなく、関羽に関わる歴史文物も沢山残されているとのことで、訪れた人々は、関公文化のその長い歴史、関公の厚い精神などを感じるそうです。

‘わんりい’掲載原稿募集

‘わんりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っていますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

*** 問合せ：‘わんりい’事務局へ ***



笑うと小さなえくぼが出来ます。純真で無邪気さ溢れる笑顔を見たら、誰でも愛せずにはいられないでしょう。この子は海芳といって、2001年5月、初めて出会った時は北山小学校の一年生でした。黄土高原のど真ん中、黄河近くの貧しい僻地でこのような可愛い子どもを見かけたら、あなたの一日の疲れも瞬時に消えてしまうに違いありません。

藍色の運動着の上にローズ色のチョッキを重ねて、顔いっぱいの笑顔がこぼれそうです。赤い靴には沢山の毛糸のボンボンが付いています。こんな風に愛娘を装わせるとは、ずいぶん遣いのこまやかなお母さんです。海芳は地面にべったり座り、手に鉛筆を持って使い古された教科書に点や線を書いていた。黄土の壁が背景でなければ、皆、町の子が遊んでいると思うでしょう。

10日後、私は再びここに来ました。たったの10日しか経っていませんのに、気温はずっと高くなり、5月の日差しは、初夏の先触れのように、子供達は皆夏の装いになっていました。海芳も藍色の布飾りを縫い付けた白いワンピースを着、きれいに梳かした前髪を切りそろえ、後は羊の角のように一対のお下げに編み上げてピンク色のリボン飾りをつけていました。大きな眼をぱちぱちさせて、あなたに笑い掛けたら、誰でも立て続けにカメラのシャッターを押してしまうと思います。

同じ年の夏休み、私は海芳の家にアンケートを書いてもらいに行きました。簡単なアンケートでしたが、一年生の子どもには、それも教育水準の低い地域の子どもには、アンケートに書き込むのは難しい様子でし

た。しかも皆が注視している中です。嬉しそうにしていた海芳でしたが、母親に催促されたり、仲間が取り囲んで見ているのでどうしてよいか分からなくなってしまいました。海芳はすっかり緊張して、緊張すればするほど書けなくなり、とうとう泣き始めてしまいました。泣き始めると自分でもどうしてよいか分からなくなって、油の瓶を下げられるほどに小さな口を尖らしているだけです。どうにかアンケートを完成させ、持って来たのを見ると私はいっぺんに楽しくなりました。アンケートには“大きくなったら軍人になる”と書いてあるのです。まあ、なんて元気なんでしょう！



海芳实实在在是个山里娃。
(2001年11月)

私は海芳を門の入り口のシェパード犬のところへ引っ張って行って、“解放軍になりたかったら泣いちゃ駄目だよ。ほら、シェパード犬も海芳を怖がってるよ”と言いました。実は、このシェパード犬は私をはじめて見た時には狂ったように大きな声で吼え立てましたが、この時は、海芳の傍らで静かに寝そべてい

ました。雰囲気がよくなったので、ついでに海芳とお母さん、お母さんの方のお祖母さんも一緒に記念撮影をしました。

多くの子どもの取材をしましたが、お母さんたちの殆どは自分の子どもの生年月日を正確に言えません。過ぎた日々を押し量って、おおよその日にちを言うだけです。海芳のお母さんだけがすぐに正確な年齢を伝えました。学校に行ったことがあるか訊いてみますと案の定小学校に行っていたとのこと。女の子は社会を継続させる一員であり、いつか必ず人の妻となり、人の母となります。教育を受けなければどうやって彼らの子供達を教導くことが出来るでしょう？

2003年3月4日は、陰暦の2月2日に当たり、農の諺で“2月2日は龍が活動を始める”といわれており、この辺りでは廟会があります。廟会といっても今では自由市のようなものです。人々は春の農作業に必要な化学肥料や、種子、農具の類を準備し始めるのです。

しかし、この年は運悪く、ボタン雪が降り始め、あたりいちめん雪の花が舞う天気になって、あっという間に山も村も雪で覆われてしまいました。私が雪の中を歩いて行きますと、思いがけないことに前方に赤い小さな点が現れました。赤い点が近づいてきて、はっ

きり見えるところまで近づくと、それはよく知っている、可愛らしい、まだ幼い笑顔の海芳ではありませんか！どこから来たのですか？そしてどこへ行くのですか？彼女と別れてから、私は銀色に装われた世界をひとり歩きながらいろいろと想像を巡らせてみるの



劉家村に住む人は皆、劉という姓ですが、美京の姓は馬です。これは美京の家は他所から移ってきたということに他なりません。美京の元の家の戸籍はこの地から2キロほど離れた山のふもとの‘清水関’と呼ばれている村にあります。この村は、明清から中華民国にいたる間はかなり知られたところで、かつては県の役所が置かれていたとのことでした。

清水関村の名は川底が見えるほどの清冽な流れがここから黄河に流れ込んでいたことによります。当時、村は何百里四方にわたる有名な交易地であり、相当規模の大きな港町でした。一番多いときは100戸を越す家がありました。今なお微かながら道路や旅館、油の製造販売所、製粉工場、染物屋、更に劇の舞台や寺廟もあり、さぞ賑やかなところだったろうと想像できます。その頃は、黄河対岸の晋の商人、北方から下ってきた内モンゴルの毛皮商人、三辺(安辺、靖辺、定辺を合わせて三辺と呼ぶ。いずれも、榆林の西方にある地域)からやって来た塩商人や薬売り、加えてアワやキビ、ナツメ、緑豆などを売買する当地の農民などが集まり、交易し、自然に交易市場を形成するようになって明末より新中国が建国するまで続きました。その後、農村の自由貿易の発展を制限するような多くの政策が公布され、港の交易市場は次第に縮小され衰微の道を辿りました。

1958年の大躍進の折、政府は村の撤収を発令し、清水関の何十軒かの家は周囲の村に移りました。今、ここは人が去って誰も住まなくなった窑洞や崩れ落ちた住居に夏草が生い茂り、古めかしく零落したたたずまいがあります。

美京の家も1958年のときに山の上の劉家村に移り住むようになりましたが、苗字が違うので、村はずれで、清水関から一番近い辺りに窑洞を建設し生活を始めました。美京の家の先祖は商店を経営し、清水関の、

三方を川に面し、背を山に寄り添う天恵の地に正方形の屋敷を擁し、東向きには5部屋の大窑洞、その両サイドに7、8部屋の窑洞が建てられて豪邸と呼ぶに相応しいものでした。

ですから、美京が、アンケートに将来の理想のところに“大人になったら幹部になりたい”と書き込むのは不思議ではありません。父親も祖父も真剣な眼差しで美京が書き込むのを見ていましたが、書き終わると二人はホッとしたように笑いました。そうです、

どこの商人でも幹部になるのがよいのです。収入は保証され、生活は安定します。50歳余りになる美京の父親も最近村長という地位に付いたばかりです。

農村の子どもや山里の子どもたちが、僻地を離れ、山から出るには勉強するしかありません！幸いなことに美京の家の経済状況は彼女が進学する支えにもなります。更に、父も祖父も勉学が大切なことを深く理解しており、美京もまた才気のある賢い子どもですから、彼女の前途は間違いないことを確信できます。

(田井訳)



第一次遇见美京，朝阳撒在娃娃天真无邪的脸上，显出山里娃娃的淳朴、可爱。
(1999年9月)

⑨海芳

一笑一个小酒窝，笑容中透出纯真与无邪，谁见了谁不爱呢？这娃叫海芳。2001年5月初次遇见她时是北山村小学一年级学生。在黄土高原腹地，黄河岸边的穷乡僻壤里，遇见这么个可爱的娃娃，你一天的疲劳会顿时消失殆尽。

一身蓝色运动套装，上衣还套着个玫瑰红的马甲，衬托着一张笑容满面的脸庞，一双红色的鞋面上又多加了一团绒球，多么细致的母亲，这么会装扮自己的爱女。海芳盘地而坐，手握笔便在满是灰尘的课本上点划。如果没有背景斑驳的黄土墙壁，你说这是城里的孩子在做游戏谁还不信？

十天后，我又来到这里，虽然只相隔十天，但气温明显升高，五月的天，初夏的前兆，孩子们都换上了夏装。海芳的母亲也为爱女换上了一身白色镶蓝边的连衣裙，一头梳洗干净头发，前额有一排刘海，后脑梳着一对羊角辫，辫子上扎着一对桃红色的蝴蝶夹。一对扑闪扑闪的大眼睛正朝着你笑，相信此刻你也会情不自禁地在她面前多按下几下快门。

同年暑假，我来海芳家作“问卷”调查，虽然问题简单，但对于一年级的娃娃，特别是在这片教育水准低下的地域的娃娃，作答似乎有些难度，又是在众目睽睽之下，海芳由喜悦变成困惑，加上母亲的催促，同伴们的围观，娃娃变得紧张，越紧张字越不会写，这一下便急的哭了起来。这一哭又收不了场，情绪变得沮丧，小嘴翘得可挂油瓶。好在“问卷”终于完成了，拿来一看，乐了，“长大了以后当一名军人”，多么有志气！我顺势将娃娃拉到院门口大狼狗旁，告诉她“要当解放军就不兴哭，看，大狼狗都怕你呢。”你别说，开始见我大声狂吠的大狼狗，这时却很安静地躺在海芳身旁。气氛终于变得平缓起来，顺势又拉着她和母亲，外婆来了个合影。

采访过许多娃娃，娃的母亲大凡说不准自己孩子的出生年月，一般都是往前推算，也就是个大概的日子。只有海芳的母亲一口报来准确年龄，想必是读过书的，一问，果然是上过小学。女孩作为人类社会延续的载体之一，今后必然要为人之妻，为人之母，没有文化，她们又如何来言传身教于她们的后代？

2003年3月4日，阴历是二月二，农谚说“二月二，龙抬头”，这附近有个庙会，所谓庙会，如今也演变成了农贸集市。人们开始准备春耕作物所需要的化肥，种子，工具之类。然而这天不巧，下起了鹅毛大雪，雪花

满天飞舞，一阵工夫便盖满了山梁、村落。我在雪地里走着，忽见前方出现了一个小红点。随着红点的移近，我看清是一张熟悉的面孔，一张可爱的稚嫩的，微笑着的面孔，是海芳！她从哪里来？又哪里去？和她告别后，我独自走在银装素裹的世界里，作着种种猜想。

⑩美京

美京姓马，而刘家山村人都姓刘，她家是外来户。美京老家原本是离这里两里地的山下叫清水关的村子。这村子在明清乃至民国时期可有名了，听说曾经还做过县衙门的所在地。

清水关村是因为这里有清澈见底的小溪从这里注入黄河，因此而得名，但它的历史意义却是因为当年它是方圆几百里地的一个有名的贸易集散地，是个规模颇大的渡口集市。这里最多时曾经有一百多户人家，现如今仍依稀残存有街道、客栈、油坊、磨坊、染房等，还有戏台、寺庙。当年红火之景窥见一斑。那年月对岸的晋商，北方下来的内蒙皮毛商，三边过来的盐商药贩和本地农民带来的小糜谷子，红枣，绿豆在这里汇合，交易，自然形成的集贸市场自明末延续至新中国成立。但是随着新政权的建立，新颁布的多项政策限制了农村自由经济贸易的发展，关口集市也随着萎缩衰败下来。

58年大跃进时，政府施行撤村政策，将清水关几十户人家都并到周围的几个村子里。现如今这里是人去窑空，房屋坍塌，芳草萋萋，一派古风寂落的荒凉景象。

美京家也就是在58年时迁至山上刘家山村的。因是外姓，寻得村尾离清水关最近的一块地方打窑洞建房、安居生存。美京家祖上是经商的、在清水关有一处天赐良宅：三面环水，一面靠山，正方形院落，一排朝东五眼大窑，两厢七八眼侧窑，堪称是大户豪宅了。

也难怪美京在写“问卷”时将理想写成“长大了想当干部”，而在填写时，不论是爷爷还是爸爸，都十分认真地关注着美京，填写完时，爷爷和爸爸都会心地笑了。是啊，做商人哪有当干部稳当，收入有保证，生活又安定。这不，如今五十多岁的美京爸爸最近刚坐上了村长的宝座。

农村的娃娃，山里的娃娃，要想离开这片土地，走出大山，只有读书！好在美京家经济条件还供得起她上学，况且上辈人都深深懂得读书的重要性，美京也有灵性，相信她会有出息。

今回は「温故知新」(おんこちしん)です。

温故知新は、「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」と訓読します。中国語でも同じ漢字で、温故知新/wēn gù zhī xīnと読みます。

温故知新 は日常よく耳にする、大変馴染み深い熟語だと思います。「新しいことを始めるときには、温故知新の考え方が大切です。」と使ってみたり、ある造園会社のホームページでは「当社では、創業以来先代の訓えを守り、温故知新をモットーに今日まで一貫して様々な庭を造築してきました。」のように使っていました。また、ある製薬会社の新聞広告には「温故知新＝自然の中に薬があり、歴史の中に知恵がある」とありました。

さらにインターネット上には“温故知新”という名前のサイトがそれこそ無数に存在しています。温故知新を解説しているのではなく、この四字熟語を自分のホームページのタイトルにしているのです、言ってみれば自分のホームページのコンセプト^注として使っているわけです。これを見ても如何に親しまれている熟語であるかわかりますね。

さて、改めていくつかの辞典で意味を調べてみますと、中日辞典(小学館)では、「古きをたずねて新しきを知る。習ったものを復習して新しいことを知る。過去を振り返って現在を見直す。」

現代国語辞典(三省堂)では、「古きをたずねて新しきを知る。むかしのことを研究して、新しい知識や道理を見つけること。」

広辞苑では、「古きをたずねて新しきを知る。昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること。」(古い事柄も新しい物事もよく知っていて初めて人の師となるにふさわしい意)とそれぞれ載っています。

出典は『論語』為政にある次の言葉です。

(子曰く)温故而知新、可以為師矣。

(子曰く)「故きを温ねて新しきを知れば、以て師たるべし」と。

孔子は、「先人の学問や過去の事柄をしっかり研究しなさい。そこから、現実にもふさわしい意義が発見できるようならば、あなたは人の師となることができるでしょう。」と仰ったのです。

中国語を学んでいますと、いろいろと日本文化の源ともいふべき、中国の古い文化に接する機会がありますが、これこそ日本人にとっての温故知新に繋がるのではと思いました。

注) 概念・観念。創造された作品や商品の全体につらめられた、骨格となる発想や観念。

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

星祭りロマンを秘めて孫誕生

qī xī shuāngxīng càn
七夕双星灿

tiāndì yōuyōu yùn làngmàn
天地悠悠蕴浪漫

sūn ér jiàng rénjiān
孙儿降人间

季语：七夕，夏。日本的七夕节源于中国、祭祀牛郎织女双星。然而在明治维新以后、均用公历、所以将公历七月七日称七夕节、但也有地方在八月七日搞纪念活动的。不过、二者均难与农历的七月初七相合。此句描写了作者喜得孙儿的喜悦。本来七夕节就蕴藏着浓厚的浪漫色彩、而在此时得孙、确实令人格外庆幸。难道孙儿的诞生与七夕的传说有关吗？答案只有在心中琢磨吧！

夏の暁男子の印しかと見て

shèngxià yīqīng chén
盛夏一清晨

què shí kàndào xiǎo nán gēn
确实看到小男根

kě ài xiǎo sūn sūn
可爱小孙孙

此句描写了作者喜得孙子的欢快心情。夏天的拂晓、尽管还是薄明时分、光线不算明亮、但目睹孙子的亢奋心情早已按捺不住了。做祖母的望着孙子的小鸡鸡、无以言表的喜悦油然而生。是呵、眼前的确是孙子、不是孙女、祖母凝望着小孙孙的男根、感慨万千……

是不是作者有重男轻女的思想呢？不过、祖母毕竟是祖母、其心情与婴儿父母的现代思惟毕竟有别

▶ 整備された路

韓国で漢拏山は人気があり、休日ともなるとかなりにぎわうそうだ。幸い5月4日は韓国では平日なので、登り始めたときは、他パーティーの気配はなかった。ウグイスの声を時おり聞きながら、芽吹いた樹林の中を緩く斜上した。路幅はかなり広くとってあり、一部を除いて対向者と十分すれ違える広さだ。登山道の両側は張り渡したロープがどこまでも延びて、初心者でも迷うことはない。玄武岩質の巨石累々とした涸れ沢を何本か渡った。

7時55分、比較的大きな谷「耽羅溪谷」の涸れ沢を渡る。標高約840m。すぐにコンクリート造りの「耽羅溪谷小屋」が現れた。ここからは、「蟻項」へ続くやせ尾根をたどる。漢拏山が日本の山道と違うのは「ぬかるみ」が無いことだ。地面の保水力がゼロなので、水たまりができない。従って靴が汚れない、快適である。登山道の一部は長い木道になっている。木道の構造は、長い2本の鋼材をレールのように置き、その上に横置き板をすき間なく敷き詰める。板のすき間が摩擦となるので滑らない。幅も広いので対向者とのすれ違いが難なくできた。日本の木道でも真似をすればよいと思ったが、日本の山で同じ工法をとると泥濘の上に鋼材を置くことになるので、やはり無理か。

標高1000mをすこし超えると、芽吹きが無くなり、季節が戻った。路の両側には、青いスミレが彩りを添えた。さらに進むと、広葉樹の林はなくなり、マツ林になった。山火事後に生えたマツ林かと思ったが、どこまで進んでもマツ林で、これが針葉樹林帯の下まで続いた。

樹床は、背の低い笹が生えていた。標高を上げると笹の葉に最近まで雪で埋まっていた証拠の皺があった。このコースは北面なのでかなり雪が積もったようだ。

「蟻項(개미목)」は、知らぬ間に通過してしまい、やがて視界が開けると、三角峰(1696m)が現れた。マッターホルン状で凛々しいが、実はこの山は単なる尾根の末端で、一方美人だ。なおも行くと見晴らしのよい尾根上に板張りの休憩所があり、小休止をとる。10時10分。



[左] 登山道脇には、現在地を示す案内板と、[右] 一定の間隔を置いて立つコースポスト。「5-4」とは観音寺コース(5)の4番ポストという意味。緊急連絡先電話番号が標記してある。

▶ 同行者の膝に故障が

実は、同行のS女は膝に故障があった。彼女は濟州島行き直前になって、自分なりに調べた結果、行程が長すぎるので山行は辞退すると申し出た。それを他のメンバーが何とか言いこめ、登りと下りのコースを入れ替えて急坂の「観音寺コース」を登る案に変えたのだ。下りが緩い方が膝によいので、下山は傾斜の緩い「城板岳コース」にしたのだが、結果として変化のあるコースを登りにとってよかったと思った。

尾根を離れ、ここから左に下る。三角峰の側面を巻いて、「耽羅溪谷」の源流に降り立つのだ。道は崖際の傾斜地を巧みに抜け、しっかりした木道が続いた。柵の一部が今年の雪で谷側に押し倒されていた。

見上げると「耽羅溪谷」の奥に漢拏山の頂上部分と、それを取り巻く峰が現れた。少し雪が残る水場の枝沢を横切り、耽羅川の河原まで下ると、大ぶりのエンゴサクが咲いていた。

小川を渡り、背後の山を屏風にして建つ「竜鎮閣小屋」に着いた。覗くと中はコンクリートの床で冷たそう。トイレ棟が別にあり拝借。一带は、まばらな針葉樹林となり高山の雰囲気だ。

ここから登山道は、谷底から左手の尾根をめがけて這い上がり、全コースで最も急勾配となっている。日本の山によくある、小砂がザラザラしたザレ場がないので、登りやすい。振りかえ見る本峰は、山体基部をえぐられて空中にせり出

し、迫力のある北壁を形成している。咲き始めたゲンカイツツジ(玄界躑躅)が陽を浴び点々と眩しい。

息も荒く登り詰めると、そこは広い山稜の小鞍部となっていて、一息つくところだ。標高約1700m。登山道からは見えないが、左側はすぐに尾根の末端となり、巖を付けた岩壁で縁取られた半円形の断崖となる。これを麓から見ると、ピンの蓋「王冠」を



巨岩ゴロゴロの耽羅(タンラ)溪谷を渡る。



一方美人の三角峰



漢拏山頂上北壁とゲンカイツツジ(玄界躑躅)。山の反対側に「白鹿潭」[右写真]がある。



頂上から見た「白鹿潭」、なぜかカラスがたくさん居た【たまたま写っている】。カラスらしからぬ悠々とした飛び方をした。



山頂の賑わい。

側面から見たようなので「王冠稜」と呼んでいる地形だ。

ここまで上がると遙か下界が見渡せて、済州市の街並みが青く霞んで見えた。周りの針葉樹やダケカンバは矮小化し、植物の生育には辛そうだ。時計を見れば11時を過ぎ、登山開始からおよそ5時間経過した。標準体力なら今頃山頂だが、我々は軟弱隊なので青息吐息。緩く北方に続く岩尾根を登ればよいだけになり、あと1時間ぐらいで山頂か。露岩の道はときおり階段や木道に変わる。木道にはひも状に切り刻んだ古タイヤを、ネットにして敷き詰めた箇所があり、そこを歩くと膝への衝撃が柔らかでよい。

竜鎮閣小屋を過ぎてからは、登山者が増えて何組かに追い抜かれ、前方からも山を越えて下山する数グループとすれ違った。下山の組は、登頂後の余裕からか、「안녕하세요(アンニョンハセヨ)」といいながら、笑顔で下ってくる。路ばたでにぎやかにしゃべりながら、一休みのグループもある。日本の山に比べると、若者が多いので登山道に活気があった。

▶いよいよ山頂へ

とうとう、「白鹿潭」を見下ろす山頂の一角にたどり着いた。「白鹿潭」は山頂火口にある小さな池で、実物より名前の方が美しいと思った。それでも見る^{ハルラサン}ことができ嬉しい。

12時5分「山頂」に到着。そこは正確には漢拏山東峰で最高点ではない。頂上の周りは柵で囲っており、登山道以外はむやみに立ち入れないようになっている。最高点1950mの西峰は尾根づたいに10分もあれば行けそうだが、入り口には「관음사코스(立入禁止)」の看板があり、行くことは見合わせた。

「城板岳コース」から来た人たちが大勢いたので、周りは

大賑わいであった。頂上部は板張りのスノコで地面を覆い隠してあり、写真で見た伯耆大山の山頂のようであった。記念撮影後、スノコの一角に陣取り昼食休憩。

行軍訓練らしい青年兵が数十人、軽機関銃を首から下げて「城板岳コース」を登ってきた。銃は銃床がプラスチック製で軽そうだが、プラモデルのようで本物らしく見えない。兵隊さんたちも山頂に着くと解放されて、昼食になった。彼らの軍食は特大の「太巻き」2本で、でかいなーと思いつつ注目していると、兵糧はあっけなく紺色軍服の胃袋に収まってしまった。さすが若さだ。

12時44分に下山開始。旅行会社の車が4時に「城板岳コース」入口で待機の予定だ。緩い階段や、岩混じりの道がながながと続く。登山道から見下ろすとはるか樹海の中に道の帯が吸い込まれ、行く先は遠い。平日とはいえ「城板岳コース」は往来が盛んで、登る人とすれ違ったり、下山の人に抜かれたり、狭いところでは道を譲ったりの繰り返しだった。抜かれることはたびたびだが、抜くことは皆無である。

単調な道だが「ツツジ畑小屋」付近で、咲き始めたゲンカイツツジ、が色鮮やかであった。かなり歩いたが約束の4時は過ぎてしまいそうなので、私が先に行くことにした。快調に飛ばしたが、それでも着いたのは4時を過ぎた。金^{キン}京^{キョウ}美^ミさんが待ちくたびれた顔で駐車場にいた。しばらくしてが、仲間のA氏が1人で現れた。A氏によると、さすがに遅すぎて後の2人は置いてきたそう。残りの2人が着いたのは5時過ぎで、5月の連休という忙しい時期に京美さんを待たせてしまい心苦しかった。

牛歩で下山したのでS女の膝は何事もなく、温存できた。

明けて5月5日は、コースを変えて、漢拏山「霊室コース」～「オリモクコース」を歩いた。しかし天気は崩れ、強風と霧が流れる中を歩いたので景色はほとんど見えなかった。こちらのコースは標高差500mだけなので、楽だった。

運転手の榮培さんに、2日続けて山に登る人は初めてだとあきれ顔に言われた。

残りの2日は普通の観光客になって島巡りをした。(終わり)

■注記:「山小屋」現地表記は「避難所」だが日本風に「小屋」とした。

日本のアジソンマに支えられ、韓流ブームは今も続いている。“冬ソナ”はオバサンたちの韓国への偏見を憧れに変えてしまった。

そう、かく言う私もすっかり韓国ドラマにはまっている。我らリュウマチの患者仲間の間でも情報通がいて、自然発生的に韓流ネットができてしまった。ソウル在住の友人夫婦が、そんな私達を「日本のオバサンたちは大丈夫かい？他にやることはないのか…」と、心配を通り越して怒り直前の顔で言ったものだ。「いやいや、日本のオバサンを侮ってはいかん！ハングル講座に、ドラマで知る韓国の歴史と、単なるファンではないよ。それにヨンサマオタクのオバサン達が韓国に外貨を落としている。」というのが私の反論。

友人のKは人形を作っている。ビスクドールから始め、今は紙や布などさまざまな素材で表現の域が広がっている。2005年1月、ソウルの繁華街・仁寺洞^{インサドン}で2度目の個展を開いた。その時も彼女の手伝い…という口実でソウルへ出かけた。ソウルのテレビ局からも取材に来ていて、取材時間より放映時間のあまりの短さに驚きながら個展の成功を祝っての会食の席はますます賑やかに晴れやかに過ぎていった。彼女に、リュウマチ患者のソウル旅行の現地案内人としてお願いしたのはその時だった。

2005年9月30日、羽田を飛び立った私達総勢7名(リュウマチによる障害者4名、サポートしてくれる健常者3名)はキンポ国際空港に待ち受けていた友人Kに喜びの声を上げたのだった。ソウルの空はどんよりと曇ってはいたが、ワゴン車に乗り込む私達はこれから向う“大長今テーマパーク”^注に心浮き浮き。Kの人形のお弟子さんのジンミちゃんが最後に乗り込むと、運転手・キムさんを入れて10名、満々に膨れ上がったワゴン車はポツポツと降り始めた雨の中をソウル郊外のヤンジュにあるMBC文化庭園へ走り始めた。

テーマパークは川を隔てて左側は中宗・チュンジョ^{テジョン}王の住む大殿、水刺間、退膳間、内^{テソンガン} 醫院、淑媛^{ネイウォン}になったヨンセンの居所等で、右側は姜徳九(カンドック)の酒問屋等、藁葺きの庶民の家屋がひしめいている。

生憎の大雨の中、電動車椅子のMsは雨衣をすっぽり被り傘をさしてはいるがじわじわと侵入する雨水に大苦戦、Knは人工関節の膝で何とか歩いている。私はマッコリの試飲に舌なめずりをしながら、ぬかるむ足元に杖を突きつつ大殿へと移動する。雨の勢いは衰えず、狭くて赤土のぬかるむ道、おまけに王宮は階段だらけ、Msはここで諦めた。MSCのロビーでテレビでのサッカー観戦中のMtは「ここに来れたから満足よ」と雨の中の歩行を自己規制した。ああ、まだまだ障害者が思いのまま動けるには沢山の問題をクリアしなければならぬ。

16世紀李朝の時代、陰謀渦まき宮中であらゆる困難に屈せず、自己を磨き愛を貫き、権謀術策に負けずに復讐の目標を達成した女性の物語はオバサンたちのみならず、日本中を虜にした。幼い頃、父は捕縛され母は矢に倒れ、独り生きていくチャングムに涙した人は多い。『あんな小さい子が頑張っている、私もがんばらなあかん』と、失職の危機と母の病気に立ち向かう大阪の友人はメールを送ってきた。韓流なんて、と“冬ソナ”もその後のドラマにも興味を持たなかった友人は“チャングムの誓い”には続きが待ち遠しいと言った。

撮影のセットの向こうには高層ビルが見えるのと、建物の大きさが、やや小ぶりと思うものの、私達が踏み込んだところは紛れもなく15世紀のチャングムの世界。今にもスラッカンの中から医食同源の、目に美しく食べて滋養になる料理を携えた女官たちが出てきそうな雰囲気だ。キムさんがワゴン車を中央入口に回してくれた。私達も今夜の食事は宮廷料理、Kが予約してくれたソウルの国立劇場の中にある高級レストラン！勿論、テーブル席だ。早朝から過密スケジュールの私達はワゴン車の中では居眠りで静かだったが、料理の前では撮影と食べることで忙しい。唯一人の韓国人ジンミちゃんにも、案内人Kにも少しづつ質問が出て、楽しい夕食のときは過ぎていった。

しかし、2泊を予約しているソフィテル・アンバサダーホテルでは寝耳に水のダブルブッキングが待っ

ていようとは…。

2005年6月、私は右肩の手術のため中伊豆温泉病院に入院した。手術は無事終わりリハビリの日々、ソウルからKが東京の友人と共に見舞いに来た。私は2泊の外泊許可を取り、彼女達と伊豆湯ヶ島の川端康成ゆかりの宿だという素朴なつくりの旅館へとタクシーを飛ばした。私の心を占めているのは、“秋のソウル旅行”の事、ホテルは障害者対応でベッド、トイレの高さをKに調べて貰いたいと依頼。Kがソウル在住でなければ出来ないことであったのは、後日、身に染みて理解できた。

退院してインターネットで大手旅行社に見積もりをお願いした。障害者を対象としている旅行社にも勿論依頼した……返事は皆無。せめて、飛行機とホテルのセットで、との依頼にも返事なし。なにが『わがまま、いたれり・つくせりツアー』だ！嘘つき！と、唇を噛みしめた。よし！完全自由旅行だ、Kという強い味方がいるではないか！

「大長今テーマパーク」で楽しみ、宮廷料理に舌鼓を打ち、疲れた身体を引きずって辿り着いたソフィテル・アンバサダーホテル…、Kが何度も確認の電話を入れ二部屋確保した障害者対応室…、それが、「他の部屋でよいか？」とフロントが言っている。Kとジンミちゃんは怒った。オロオロしている私にKは「私に任せて！」他の人は口を開くなと命じた。

交渉約2時間、訳が分からぬまま、若いボーイに案内され13階の豪華スイートの2部屋にMsとKn、MtとKt。YsとAi、私とK、それぞれ6階の普通部屋。この1泊は完全無料、おまけにクリーニングにミニバーもサービス。それでもまだKは怒りが収まらない。

翌日は元気を取り戻した我ら8名、ロッテワールドから行動開始。ここの博物館は車椅子で動くに便利。古代から現代まで人形や当時の家屋を使い生活の様子を展示している。景福宮^{キョンボックン}での即位式のミニチュア模型は、当時の最高の宮廷行事であったであろうと、知ったかぶりの私。結婚式に遭遇した。伝統的な衣装にお化粧はドラマで見た風景。新郎新婦の緊張感が伝わる。我ら観光客も同席できるこのシステムは何だろう…。

夜はコリアハウスでの民族芸能を楽しみ、レストラ

ン・土俗村で食した^{サムゲタン}参鶏湯は若鶏の腹に高麗人参、もち米、ナツメに栗などを詰めてスープでじっくり煮込んだ料理。日頃、小食だというMtも私達も汗だくになって平らげた。

最終日、ソウルから南へ約40kmの韓国民俗村へ。初日は宮廷見学だったが庶民の生活も見てみよう…と。MBCは『大長今』(チャングムの誓い)の前に、64話の大河ドラマ『許浚 ホ・ジュン』をここで撮影している。16世紀末の李朝、艱難辛苦の末、朝鮮の地に合う薬草と治療法を“東医宝鑑”として編纂、心医を目指した努力の医師の話である。このドラマの中に秀吉による朝鮮侵攻「壬辰倭乱」が出てくる。今も昔も日本は恥ずかしい…。歴史に学ばなければ未来はないではないか。民俗村での昼食はKお勧めの豆乳の冷麺。今回は本場の焼肉を食する機会がなかった、が、それもまた次回へと希望をつなく。

水原^{スウォン}は私が行きたいと予定に入れたところ。城郭に囲まれた美しい城、水原華城は18世紀末にソウルから遷都しようとして、国王の死により中止になってしまった不運の城だ。城郭は1周約5km、徒歩では3時間要するという。ワゴン車の中、疲労で居眠りの出ている皆を残し、長安門のアーチ型の城郭にヨロヨロ登って行った。秋の風が吹いている。陽は中天にあるのに、私の口から「荒城の月」のメロディが流れた。

電動車椅子を駆使し、アイデア満載で障害者に厳しいソウルを走ったMs。旅行費用の会計担当をしてくれた最年少Kt。自己規制しながらも笑顔で過ごしたMt。サポーターとして尽力してくれたKt、Ys、Ai。現地案内人K、ジンミちゃん、運転手キムさん。パリアフリーには程遠いソウルの街を知恵と勇気と元気で乗り越え、今は楽しい思い出に変わった2泊3日の旅。仲間には感謝と礼を述べたい。

現在Kは夫の赴任に伴いアルゼンチンの首都ブエノスアイレスに住んでいる。お隣感覚のソウルがちょっと遠くなったが、韓流マイブームはまだまだ続いている。

注)大長今は現在もNHKの番組で「チャングムの誓い」という日本名で放映されている韓国大河ドラマ。このドラマを撮影したオープンセットをそのまま残してテーマパークとなっている)

NPO法人・チベット初等教育・建設基金会(理事長：鳥里烏沙<http://www.gesanmedo.or.jp/>)は、これまで四川省カンゼチベット族自治州の理塘県の遊牧地域に小学校を建設のための調査、及び実際の建設とその後の継続支援で、たくさんの人が現地を訪れ、交流を続けてきた。

私は、ラオスでの小さな子ども図書館(といっても、絵本のある遊び小屋)(ラオス山の子ども文庫基金(<http://www.7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko/>))建設計画遂行の為、2005年11月より2006年4月下旬まで、建設地のラオスは東北部の山村に滞在していた。そのことは又後日、詳しく報告するとして、中国の黄金週を避けて、ラオス首都ビエンチャンより、雲南省昆明、四川省成都を経由して、上記のNPO法人・基金会在建設し、私も現地で直接建設に関わった小学校に向った。この小学校のある遊牧地域が近づき、標高が高くなるにつれて心拍数が増す。慣れ親しんだ高地を、長く不在にしたことを心も身体も思い出す。

しかし、小学校に到着してみると、授業は行なわれておらず、誰もいない! 県教育局の説明によると、「県中心部の小学校を除き遠隔地の全校を今年度から、5月の一ヶ月間は、公的に臨時休暇とすることを決定した」とのことだ。当てなく中心集落を歩いていると、一人の子どもが「リンムー・ニマ!(私の愛称「鈴木尼瑪」)と寄って来た。懐かしい顔、2年生の女の子だった。私がすっかり、チベット語を話さなくなってしまうのを歯がゆく思っただけ、袖を引っ張ってばかりいる。けれども他の子ども達は何処に行ってしまったのだ。

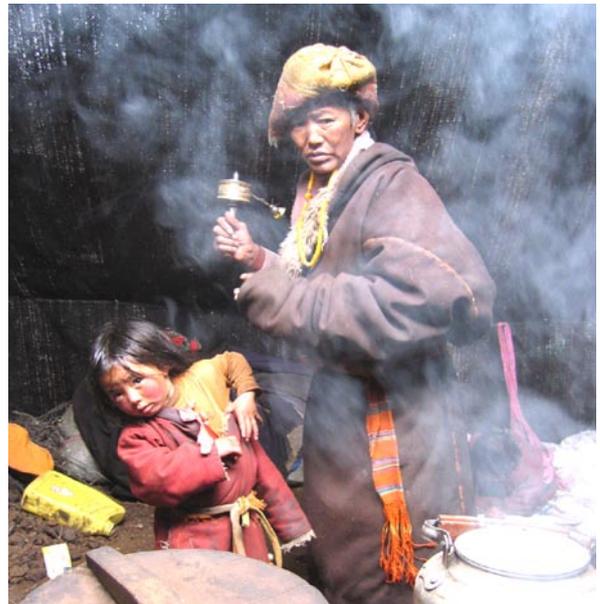
実は、就学可能年齢程度の小さい子から一家総出で、この時季にしか採れない漢方薬を採りに山に入るのである。思っても見なかった‘5月の休暇’だったが、それは、その為の臨時休暇なのである。一年間の現金収入の多くを、この時季に稼がねばならない。この時季は、小さな子どもだって大事な稼ぎ手になるのである。漢方薬の収穫期が終わると、小学校は再開され、放課後、休日の補習も行う予定である。教員達は補習をした場合の下校時の心配をしている。

今回の訪問の主な目的は、生活が困難な学生の「就学支援」の実施の為の調査であった。就学支援が必要なことはすでに承知の上で、ラオスから日本への帰国途中での寄り道であったが、調査をする前に、彼らの生活の実態を再認識するのが精一杯であった。

現地出身の教員を中心に若い教員たちも、多くの現実的な課題にぶつかりながら、一生懸命に遊牧地の生活や子ども達と向かい合っている。通常の授業の傍ら、寄宿生活を始めた18人の子どもの食事の世話、健康と安全に目



小学校中心部の遊牧テントと石積み住居を小学校の教員



親戚の子どもを集めて御祖母さんが面倒を見る

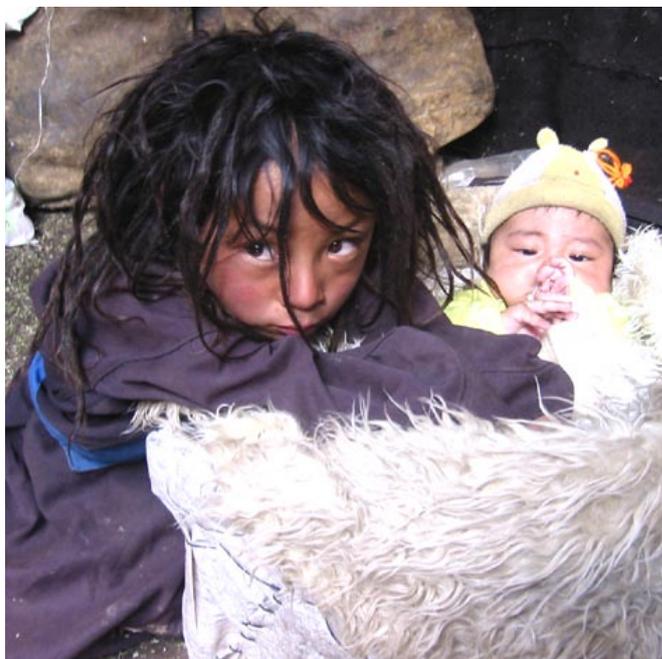
配りし、更に就学対象の子どもを探しに草原をバイクで駆け抜ける教員たち。そして、遊牧集落で生活する人々の苦勞を訴え、就学者を増やすための生活条件の改善を県教育局に懇願する1年目の教員たち。一方、家庭の方では、先生たちとは異なる心配がある。「小学校は卒業したけどヤクや羊の健康管理もできなくなったら遊牧生活はどうなるのか?」という。

ともあれ、この地を訪れた誰もが最初に抱いた疑問、「遊牧地域の小学校は、如何なるものか?」と言う命題は、ずっと問い続けられる「初原」的な出発点である。NPO法人・基金会では、今回の調査結果と遊牧地での実態を踏まえて奨学金、里親などの制度を盛り込むことを目下検討している。

(続く)



修繕後、設置される天幕 (2004年4月理塘県マオヤー地区)



遊牧テントで留守番する姉弟

中国を読む③④

赤い月

なかにし礼著 新潮文庫



日本が中国の広大な土地を占拠できると信じ、何故かつて人々は満州国に大挙したのだろうか。ずっと疑問だったが、「赤い月」を読んで、なんとなく分かった。いま、自分がいる「ここ」から脱出したかったから。身の回りに漂う閉塞

感を打ち破りたかったから。だから、彼らは日本を飛び出し、新しい土地で、新しい自分になるために満州を目指した。そして、満州はある時期、ある程度の成功を叶えてくれた。それはかりそめの夢だったけれど。

「赤い月」の主人公・波子は著者の母がモデルだそう。華やかで美しく、そして強い女性、それが著者の母だった。先進的な彼女は、北海道の小樽という古い街に倦み、夫の家族との確執に疲れ、満州国を夢見る。現状への不満、このままでは終わらないという焦り…ごったまぜになって、ぎりぎり奥歯をかみ締めたとき、そ

の先にあった満州。そこに未来があると思えば、誰でもきっと行ってしまおう。

一旗揚げたい気持ちは夫・勇太郎にもある。そうして森田夫妻は家族の反対を押し切り、海を渡った。波子の元恋人の力添えもあり、満州で使い切れないほどの巨財を得る森田家は、けれど、あっけなく身ひとつとなり、逃げ惑う。ロシアが攻めてくる直前まで、満州国の日本人たちは、「たとえ日本が敗れるようなことがあっても満州国には関係ない。満州国は確固とした独立国であるのだから」と信じている。それは、今の成功が不安定であることをどこかで感じ、そう思わなければ、不安で押しつぶされそうだったに違いない。

ロシア侵攻後の波子は、息子と娘を抱え「死なない」ことだけを目的に生きる。自分たちの列車にすがりついてくる日本人を振り落とし、食べ物を恵んでほしいという貧しい親子を無視し、自分たちが生きるためだけに生きる。生きるモチベーションを上げるために、夫の気持ちを裏切り、好きな男とやりたいようにする。「生きる」という目的の前で、彼女は究極的に純粹だ。だからこそ、そこに価値観を超えた美しさが見えてしまう。(真中智子)

モンの民話に「みなしごとさる」という話がある。両親を亡くしたみなしごは、意地悪な兄夫婦と暮らしている。ある日、兄嫁にトウモロコシの種をもらうが、兄嫁は意地悪なので、「炒ってから蒔くのよ」と言う。みなしごは言われた通りに火にかけて炒って蒔いたので、いつまでたっても芽が出ない。

仕方なく、台所の隅に落ちていたトウモロコシの粒を拾ってそのまま蒔くと、今度は芽を出し、ぐんぐん育ってトウモロコシになった。しかし、サルたちがやってきて食べてしまう。困ったみなしごは仙人に知恵を授けてもらう。言われた通り、トウモロコシ畑に

横になり死んだふりをする。サルが来るとブー！とおならをする。サルは「牛が死んでいるぞ。もう腐って臭いぞ。葬式を出してやろう」と、崖を担いで山の頂上へと上っていく。山の頂上に着くと、サルたちは葬式の役割分担をして、葬式の準備に駆け回る。そして、最後にお供え物として、金銀財宝を持ち寄ったところで、みなしごは、「わぁ！」と大声を出して起き上がったので、サルたちはびっくりして逃げ、みなしごは金持ちになった。

意地悪な兄の方は、話を聞いて真似るが、サルに運ばれる時に、「崖から落とすなよ」と声を出して、びっくりしたサルが崖から落としてしまい死んでしまった・・・という話である。

さて、山の村に滞在している間、山道を歩きながら、ニア・ノーポーおばさんに、サルを獲る罠の話聞いた。

「私が小さい頃には、サルはたくさんいたのよ。トウモロコシが実る頃になると、もう群をなしてトウモロコシを食べにやってきたわ。サルが憎たらしいのはね、一口食べては投げ、他の実を手を延ばしてちょっとかじって、また他の実って具合だから、全部ダメになってしまうのよ。小さい時に、私とおかあさんは、畑に

サルを追い払いに行ったんだけど、サルは女子どもを馬鹿にして、全然怖がらない。かえって、大きいオスザルが向かってきたりして、恐くなって逃げたよ。それで、おとうさんや村の男たちが、サル檻っていう罠を作ったのよ。罠を作って、中にトウモロコシを入れておいて、サルがトウモロコシを食べに来ると、檻の扉がバタンと落ちる仕掛けね。サルたち、食べようとして先を争って入るのよ。大勢入ったところで扉が落ちて、出られなくなって、外から人間たちに槍で突かれると、オーイオーイって悲鳴だしてね・・・」

ほんの数十年前まで、ラオスの山にはサルが本当に

たくさんいたそうである。サルだけではなく、クマやイノシシ、トラ・・・トウモロコシの実りの季節には、サルやクマが食べにやってきた。民話で語られている状況は作り話ではなく、つい最近まであった本当のことなのだ。人間が必死に育てる作物を、山に住む動物



たちは虎視眈々と狙っていた。民話では、サルをだまして金持ちになるのだが、現実には、いかにして追い払ったり殺したりして自分たちの作物を守るか・・・罠を作ったり、銃を持って見張ったりの必死の攻防戦が、人間と動物の間で行われたのだろう。人間もちゃんと自然のサイクルの中の一存在として生きてきたのだ。

現在、もうサルもいない。クマもトラも、その姿をほとんど消した。この辺りが戦場となった1960～1970年代以降、爆撃と、その後の地雷や手榴弾などを使った罠で急激に姿を消したのである。人間は他の動物を恐れることもなくなっている。・・・

それでもこれは、ラオスの山奥での話。人々はまだ自然のサイクルの中で必死に土を耕し生きている。日本では、もうとっくの昔に、人間が偉くなってしまっている。現在、人間が信じられずに恐れるのは人間か・・・と、半年ぶりの日本でニュースを見ながら、そんなこと思ったりしている。

【活動報告】 夏を呼ぶ南洋の味・インドネシア料理

2006年6月4日(日) 於：麻生市民館・料理室

講師：ロサリタ



和気あいあいと料理を楽しむ



できあがって嬉しい食事の準備完了

2006年の、‘わりい’料理講座は、和光大学経済学部のバンバン助教授夫人であるロサリタさんをお願いし、インドネシア料理の代表格ともいえる、インドネシア炒め飯‘ナシゴレン’、ピーナッツドレッシングをたっぷりの野菜サラダ‘ガドガド’ほか、サテアヤム(焼鶏)とデザート2種に挑戦しました。

同じ東南アジア圏にありながら、タイ料理やベトナム料理のサッパリ味に比べると、ピーナッツやココナッツシュガーをたっぷり使う、全く傾向が異なる可なり濃厚な味。インドネシア料理を初めて食べたのは、もう、40年以上昔、日系二世米国籍の友人のお母さんが連れて行ってくれたインドネシア料理店でした。そこで初めて食べたガドガド。その美味しさにすっかり病みつきになって、インドネシア料理店に行けば必ず注文し、家であれこれ試しても似て非なる味ばかり。ナシゴレンもわかりました。

長い年月が経って今回やっと分かったインドネシア料理の贅沢で複雑な味の秘密は、山のようなピーナッツのほか、海老を発酵させた調味料のガピやマメ科の酸味の強い果実タマリンド、とろりと甘いインドネシアケチャップ、そして、東南アジア料理材料の定番、ココナッツミルクなどなどの微妙なブレンド。美味だし、美肌へ効果が期待できるけど毎日食べたら栄養過多になるなー、などと思ったら、案の定、講師のロサリタさんも、日頃は日本料理を食べるようにしていますとのこと、言い方に実感がこもっていました。

とはいえ、美味しさのなぞが解けた嬉しさはひとしおで、友人達とインドネシア料理で交流しているこの頃です。と同時に、美味しいものを追求してやまない、それぞれの民族の味覚に今回もまた脱帽でした。ベースが出来れば調理はいたって簡単、ナシゴレンに目玉焼きを乗せ、胡瓜やサラダ菜、トマトで飾るととても可愛らしい一皿になりますし、彩り美しいガドガドサラダは豪勢で、持ち寄りパーティやホームパーティで話題を提供してくれるでしょう。

昨今の日本では、手に入らない食材は殆どないといえますが、それでも手近なところで購入するのは難しいです。しかし、伝統的な日本料理は日本料理として、これまで好奇心旺盛に世界中の味覚を自分のものにしてきた日本人の皆さんですから、インドネシア料理が日本の家庭にどんな形で溶け込んでゆくか楽しみです。(田井)



今日のお昼は少々食べすぎ?

‘わりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会として、日本に外国の方々が増え始めた1992年に活動が始まりました。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わりい’HPをご覧ください。

‘わりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ：‘わりい’ TEL/FAX：042-734-5100

見て、聞いて、触れてアジアを体験しよう！子どもも大人も全員集合！！

アジアの子供たち、どんな絵を描いてるの？ どんな遊びをしているの？
NGO 団体が集めたアジアの子供たちの絵画と玩具 & 写真展 (無料)

参加団体 NPO 法人ネパールミカの会 ●日本スリランカ文化交流協会 ●日中文化交流市民サークルわんりい ●NGO アジア草の根支援交友会 ●ネパールソングートに親しむ会 ●パレスティナ子どものキャンペーン ●西東京朝鮮第二 初中級学校 ●アンコール・トム ●ラオス山の子ども文庫基金

▶ 2006年7月4日(火)～9日(日)

於: まちかどギャラリー (町田市原町田4-6-8)

- ・JR 横浜線町田駅東急ハンズ側改札口徒歩3分
- ・小田急線町田駅東口(カリヨン広場口)徒歩7分

▶ 7月4日(火)～7日(金) → 13:00～18:00

8日(土) → 11:00～18:00

9日(日) → 11:00～16:00

● どの国の子どもも大人も、
 みんな一緒に仲良く遊ぼう！ (於: 上記会場)

▶ 7月8日(土) 13:00～ けん玉遊び

(指導: NGO アジア草の根支援交友会)

14:00～ スリランカの絵本の読み聞かせ

(日本スリランカ文化交流協会)

▶ 7月9日(日) 12:00～ 朝鮮半島の遊びと歌 (指導: 西東京朝鮮学校第二初中級学校)

13:00～ ネパールダンスを踊ろう！ (ネパールソングートに親しむ会)

14:00～ 折って遊べる、楽しい折り紙 (日中文化交流市民サークル'わんりい')

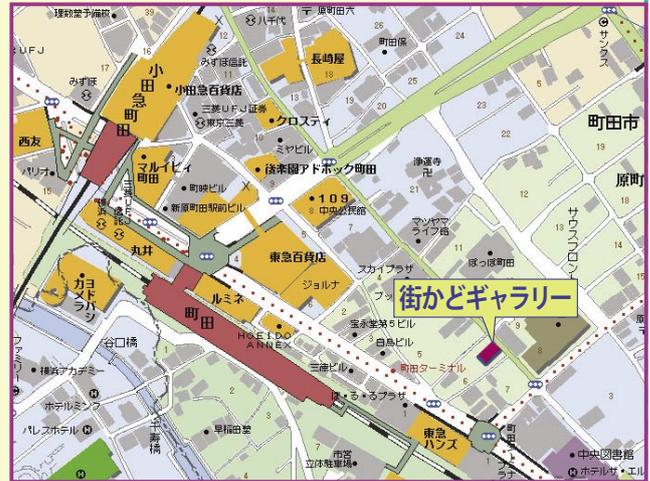
14:00～ けん玉遊び (ボランティアスタッフの皆さん)

● 講演会「スリランカにタコノキを植える」

▶ 月8日(土) 15:00～16:30 講師: 和光大学教授 渋谷利雄 先生

【問合わせ】 町田国際交流センター 042-722-4260 info@machida-kokusai.jp

【主催】 財団法人町田市文化・国際交流財団



おめでとう!!

「アフリカとの出会い」シリーズで、アフリカを紹介下さっている、アフリカンコネクションの竹田悦子さん
 と御夫君・ガスパレイ ミグィ キルスさんの間に可愛らしい男の赤ちゃん誕生しました。



誕生日: 2006年5月19日

名前は穰(じょう)クンです。



8月の定例会: 8月18日(金) 13:30～田井宅

おたより発送: 8月29日(火) 13:30～田井宅

どなたでも気楽に御参加下さい。

京劇俳優・張紹成が届ける笑いと驚きの京劇ショー
 伝統京劇の立ち回り喜劇の名作「三岔口」と食事の宴

出演: 張紹成 冠然陳浩 特別出演: 費賢蓉

8月26日(土) 於: ホテルラポール千寿閣
 相模原市上鶴間本町3-11-8

第1部: 特別ランチ 12:00 京劇ショー 13:30～14:30

第2部: ディナー 18:00 京劇ショー 19:30～20:30

前売り: 12,000円

● 予約&問合わせ: 042-749-1121 (代) ホテル予約係へ

中国の楽器——その音の広がり その1

賈鵬芳 擦弦トリオ

出演: 賈鵬芳(二胡)、他、ベース、チェロ)、ピアノ
 2006年7月30日(日) 14:00開演(13:30開場)

於: HAKUJU HALL

代々木公園駅(千代田線)、代々木八幡駅(小田急線)徒歩5分

■ 前売り: 5,500円 ■ 当日: 6,000円 ■ 全席指定

予約&問合わせ: ラサ企画 TEL/FAX 03-5748-3040

E-mail: lasanon@db3.so-net.ne.jp

● 八月は'わんりい'の発行はありません。お元気で素敵な夏を過ごされますようお祈りしています。